<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Title</td>
<td>ラマルク・ベーア・ダーウィンの親縁性・チェルヌイシュフスキーの自然淘汰説批判に寄せて</td>
</tr>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>川崎 隆司</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>一橋論叢, 76(4): 347-370</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>1976-10-01</td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>Text Version</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/11673">http://doi.org/10.15057/11673</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
ラマルク・ペーア・ダーウィンの親縁性

－ラマルクとダーウィン－

大通りには、いつも小数の天才の偶像のみが建つられるものである。

一七九三年に、ラマルク Jean-Baptiste-Pierre-Antoine de Monet de Lamarck （一七四四－一八三九）が、
Naturelle の昆虫学および蝶学部門の教授に選ばれた会 Assemble Rationale に提案して改組されることになった博物館 （旧 Jardin du Roy）には、一九の専門部門が開かれた。博物館の二館のジョフロワ・サン・テールが就任し、ラマルク
ニオールのジブリオ・サン・テールが手がける博物館学の部門は、デュリュスの手に帰した。そこで、ミッシュレが「ラマルクの
もとにこめて来たのですのである。彼は、主に「動物哲学」ものをこめて来たのですのである。彼は、主に「動物哲学」と
もとにこけて来たのですのである。彼は、主に「動物哲学」と
ラマルク・ペア・ダーウィンの親縁性

哺乳類の中間におくというような個別のまちがいは犯したが、自然の種類は、彼自らの言葉によれば、進化的系統樹に沿って。進化的系統樹の思想に到達している。

自然は、最も単純な動物から、より複雑なものをへと移りながる。生命のあらゆるさまざまな個体を順次に生み出してきた。と考える必要がある。なぜなら、最も不完全な動物から未だに不完全な動物を生み出していくため、不規則な運動のない、不完全な動物を生み出すという。「私は、今日ある動物たちがいたとおどして同じ調子で変化する。それは、不規則な運動のない、不連続のない、ある種の動物に分けて、古生代の動物が内骨格のかわりに外骨格をもつ、それを二つの群に分けた。その際の、ラマルクの動物全部を四の類に分類した。その際、ラマルクは、この分類の全体を変えるに当って、確かな根拠は、次のように述べる。「私は、何だね。これは、実際、今日まで、このラマルクの設けた四類は、いったい、正当な修正を受けている。」

一八三〇年には、考古学のための著書『生物学』は、五冊に分かれ、その内容は、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対して、ラマルクは、生物学の本の本である。これに対
（7）ラマルク・ペーベ・ダーウィンの説線性

という考えは、ご存じのように、しばしば論争の巻き立てになる。しかし、特に、ダーウィンの理論に対する反論からは、生物学の基礎から見る見解が重要である。ダーウィンの理論は、進化の過程に自然選択の原理を応用して説明しようとするものである。その理論は、形態の変化を説明し、生物の多様性を生成する力としての自然選択を強調する。しかし、特に、新しい昆虫や昆虫の顕著な変化に対する反論が、生物学の基礎から見る見解を重要にしている。その理論は、形態の変化を説明し、生物の多様性を生成する力としての自然選択を強調する。しかし、特に、新しい昆虫や昆虫の顕著な変化に対する反論が、生物学の基礎から見る見解を重要にしている。

ある一定の動物形の一つ一つの種は、他の動物形から見ても基本的には一定している。たとえば、ある鳥類の種は、ある魚類の種よりはより久遠に遠いものであるが、これら動物形の分化がどのように進んでも、動物形の一種であることを否定できない。ただ、動物形の一種であることを否定できないとは、動物形の一種であることを否定できないことを意味する。たとえば、ある魚類の種は、ある鳥類の種よりはより久远に遠いものであるが、これら動物形の分化がどのように進んでも、動物形の一種であることを否定できない。ただ、動物形の一種であることを否定できないとは、動物形の一種であることを否定できないことを意味する。
（15）チャック、ハリー、マーサの親族

（20）「これまでの学校生活は苦労したけれど、今度は

（25）うまくいくように頑張るぞ！」「大丈夫だよ、彼女は

（30）心強いよ。」

（35）（30）ビートルズ、The Beatles, 1962年11月の歴史上の Anchorage, Alaska, 会場で

（40）ステージに登場した。
この論文の中で、チェルヌイシフスキは、人間のオルガニズムは、生命というたいへん複雑な化学的過程にあるたいへん複雑な化学的結合である。と定義したのち、有機的進化の考察から動物ににおける高次神経活動の萌芽にまで語りきろうんでいる。

（注）チェルヌイシフスキは、1961年から1971年までの20年間にわたる検査および流刑生活において、また流刑から帰ってからの1980年までの12年間において、人生の哲学的、思想的、哲学的および社会的問題を取り上げる際に、人間のオルガニズムの心理学的分析を行なった。
（19）ラマルク・ベーヴィン・ダーウィンの親縁性

口の原理を生物進化の基本要因とし、その点にまが

自然において有用な個体変化をえらぶ者は何かという

うミステリに悩む人たちでダーウィンを感動させたのは、

あることにする。彼だろうに、地球歴数年にに出る人

口の原理を生物進化の基本要因とし、その点にまが

自然において有用な個体変化をえらぶ者は何かという

うミステリに悩む人たちでダーウィンを感動させたのは、

あることにする。彼だろうに、地球歴数年にに出る人

自然において有用な個体変化をえらぶ者は何かという

うミステリに悩む人たちでダーウィンを感動させたのは、

あることにする。彼だろうに、地球歴数年にに出る人

自然において有用な個体変化をえらぶ者は何かという

うミステリに悩む人たちでダーウィンを感動させたのは、

あることにする。彼だろうに、地球歴数年にに出る人

自然において有用な個体変化をえらぶ者は何かという

うミステリに悩む人たちでダーウィンを感動させたのは、

あることにする。彼だろうに、地球歴数年にに出る人

自然において有用な個体変化をえらぶ者は何かという

うミステリに悩む人たちでダーウィンを感動させたのは、
sentiment

Ibid., c. 772.

Ibid., c. 769.

H. L. Heppener, idem, in 10, c. 766.

\( \text{sentiment, } \) ibid. in 10, c. 772.


sentiment, existence

sentiment, existence

"sentiment, existence"
ラマルク・ベア・ダーウィンの親縁性

(21) ラマルク・ベア・ダーウィンの親縁性

をひき起こす。

(12) J. B. Lamarck, Philosophie Zoologique, 1809, 335.

(11) R. E. B. Borra, Ober Entwicklungsgeschichte der

チャールズ・ダーウィンの進化論は、ラマルクの使用
不使用説を、明らかに自分が樹立した自然淘汰説と、き
わめてたくみに、そしてときに、矛盾した新説である。

* * *

私は、我々の飼育動物において、使用がある部分を強大に
し、不使用がそれらを縮小すること、そして、こうした変化
が遺伝されることは、何らの疑いはあきらめ、長い間、
関心をつけた使用不使用の結果を判断する比較の基準をもって
いない。しかし、多くの動物は、不使用の結果として説明で

* * *

このような見解では、「軽いものか、ものではない」と皮肉
などという見解ほど、「軽いものか、ものではない」と皮肉


"...vergez, mon père..."

"...standing your admirer. The ours..."